

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：ひゃくえむ

5 回目

今回のテーマ

I. スポーツアニメの変遷とひゃくむ

II. 子ども時代のトガシと小宮の交流について考える

III. 高校時代のトガシと小宮について考える

I. スポーツアニメの変遷とひゃくえむ

これまで1960～70年代の「エースをねらえ!」、2010年代の「ハイキュー!!」と扱ってきた。両者と「ひゃくえむ」が異なる点は、100m走という競技を通じて「なぜ走るのか」「なぜ生きるのか」という実存的な問いに踏み込む作品であるということである。この作品は「エースをねらえ!」にみられる父性の導きも「ハイキュー!!」にみられる母性的な抱えもない裸の個として、生きることを意味をどう掴み取るのかが問われている。

II. 子ども時代のトガシと小宮の交流について考える

きょうだいトラウマにおけるトガシと小宮

幼児にとって母との関係は世界のすべてであるが、新しい赤ちゃんの誕生によりその独占的な関係は永遠に失われる。この時、子どもの心には赤ちゃんを排除したいという激しい衝動が生まれる。そのトラウマ的情緒

をジュリエット・ミッチェルは、きょうだいトラウマと名付けた。親子関係の垂直軸（父の法）に対し、きょうだい関係という水平軸に着目した（母の法）。それは「排除したい相手と共に生きる」ことを求めるものでありその根底には喪失の受け入れという痛みが伴う

トガシと小宮は走ることを通じて、ある種きょうだいとなった。トガシは速いが走ることに何も見出しておらず、小宮は痛みで痛みを打ち消す自傷的な走りをしていた。しかし互いの存在によって走るものの質が変わり始める。ここにきょうだいトラウマの構造が現れる。小宮の台頭はトガシの存在を脅かすが、同時に小宮がいるからこそ走ることに意味が芽生える。この両価性がきょうだい関係の核心である。しかし小宮の突然の転校により、きょうだい葛藤に向き合う機会すらないまま関係は断ち切られた。トガシには処理されなかった喪失が、小宮にはトガシを追い越すことへの無意識的な恐れが残った。その二人が高校生になり、インターハイの決勝で再び同じ舞台に立つ。

Ⅲ. 高校時代のトガシと小宮について考える

1) トガシのケース

高校に入り、走ることをやめていたトガシを変えたのは、浅草葵の存在であった。廃部寸前の弱小陸上部でただ一人、陸上への情熱を燃やし続ける葵は、トガシに走ることを求めた。しかしそれは、速さや結果を求めるものではなかった。葵はただ「100m を走るトガシ」という存在を受け入れたのである。

この受け入れが、トガシにとっての抱える環境（holding environment）となった。葵に抱えられることで、走ることが、誰かの期待に応えるための行為でも、意味を問われる行為でもなく、ただ無心に没頭できる「遊び」になったのである。それがウィニコットのいう潜在空間（potential space）であると考えられる。

2) ウィニコットの潜在空間（potential space）

イギリスの精神分析家 D.W.ウィニコットは、人が創造的に生きるために不可欠な心の領域として「潜在空間（potential space）」という概念を提唱した。

潜在空間とは、内的な空想の世界と外的な現実の世界の間にある「第三の領域」のことである。子どもの遊びを思い浮かべるとわかりやすい。たとえば子どもがごっこ遊びをしているとき、子どもは自身が本物の勇者やスポーツヒーローとは思っていない。しかし同時に、遊んでいる間は大活躍している体験に没頭している。これは空想でもなく現実でもない、その間にある独特の体験の領域である。

大人にとっても、この潜在空間は生きる上で欠かすことができない。たとえば音楽に没頭しているとき、スポーツに夢中になっているとき、人は現実を忘れていたわけではないが、現実の重さから一時的に解放され、生き生きとした感覚の中にいる。ウィニコットはこの体験を「遊ぶこと（playing）」と呼び、人が本当の意味で自分自身でいられるのは、この潜在空間の中においてであると考えた。

ただし、潜在空間は一人で作り出せるものではない。ウィニコットが強調したのは、この空間が生まれるためには、人は誰かに受け入れられ、支えられているという感覚があって初めて、潜在空間の中で創造的に生きることができるのである。

3) エディプスコンプレックス——父を超えること、父に潰されること

エディプスコンプレックスの核心にあるのは、「父を殺して、その座につきたい」という衝動と、その禁じられた願望に対する処罰への恐怖の間で引き裂かれる葛藤である。子どもは成長の中でこの葛藤と向き合い、やがて実際に父を倒すのではなく、父の存在を認めながら自分自身の道を歩んでいくという形で乗り越えていく。しかしこの葛藤が過度に強い場合や、向き合うための心理的な余裕がない場合、子どもはこの葛藤に押し潰されてしまうことがある。本作では、このエディプス葛藤が仁神と父親の関係に現れるだけでなく、小宮とトガシの関係にも現れ、小宮の高校時代の葛藤へとつながっていく。

③仁神タケルの挫折と復帰——エディプスコンプレックスに潰された走り

仁神タケルは 100m 元日本代表の父を持ち、幼い頃から父の期待に応えるように走ってきた。父に従うことがそのまま父を超える道になるという幻想を抱いていたと思われる。しかし高校生になり身体が大人に近づく中で、父の期待通りにやっても父には届かないという現実が突きつけられる。思春期にエディプス葛藤が再燃し、走ることが父との比較の場となる中で、自分の走りを見出せない仁神は走ること自体をやめるしかなかった。

しかしトガシに誘われて走った 100m が転機となる。12 秒 13 という凡庸な記録であったが、父の重圧から解放された場所で「自分はまだ走れる」という身体との再会であった。トガシと横に並んで走る体験の中には、父の期待も評価も勝敗もない、走ること自体の手応えがあった。父の幻想に支配されていない走りを初めて体験した仁神は、陸上部への復帰を決意する。

④小宮のケース

小宮は中学時代の怪我が癒えた後も全力で走ることができないでいた。この恐怖の奥には、小学時代のトガシを追い越すことへの無意識的な恐れが身体の次元に現れていた可能性がある。

転機を与えたのが財津との出会いであった。財津の講演で小宮は自ら質問に立ち、怪我が治ったのに全力が出せないと打ち明ける。財津は「不安とは君自身が君を試す時の感情だ」と語りかけられる。このやりとりのなかで小宮はトガシに代わる新たな父性的対象を財津に見出したのである。その際小宮は「日本記録を塗り替える」という宣言したが、それは父親殺しの不安を、記録という目標の形に変換し前に進もうとする試みであった。

財津という父性的対象を得たことで、小宮はトップスピードに乗る怖さを克服し、記録は飛躍的に伸びていく。しかし小宮は、潜在空間を作る機会を得られず、より一層孤独な道へと進んでいく。

ここにトガシとの対照が浮かび上がる。トガシの高校時代には葵という抱えの存在があり、仁神というきょうだいがいた。彼らとの交流はトガシにとって潜在空間となり、走ることの喜び、意味を見出していった。一方の小宮には、そのような存在がいない。父性的対象がトガシから財津に変わっただけで、理想化された対象を見上げ乗り越えるという垂直的な関係の構造自体は変わっていない。走ることは「記録を塗り替えること」に集約され、小宮は一人孤独に、記録という数字だけを相手に走り続けることになる。そしてインターハイの決勝で、小宮は再びトガシと対峙する。

4) トガシと小宮の再会 処理されなかった喪失の重さ

インターハイの決勝、雨の中で二人は再会する。子ども時代に突然断ち切られた関係が、晴れやかな舞台で

はなく雨の中で再び結ばれるということが、処理されなかった喪失の重さを暗示している。

決勝でトガシは小宮に敗れる。しかし走り終えた後、小宮がトガシに告げたのは「トガシくん、走り方、変わったね」という失望の言葉であった。小宮はずっとトガシを父性的な理想化された対象として追いかけてきた。「あのトガシに追いつき、追い越す」ことが小宮の走る意味であった。しかし目の前のトガシは、かつての走り方をしていない。葵に抱えられ、潜在空間の中で走ることを覚えたトガシは、小宮が追い求めていた「あのトガシ」とは別の存在になっている。

小宮はトガシに勝った。しかし勝利は空虚であるように感じられる。追い越すべき理想化された対象がもうそこにいないのだから。「100mを誰よりも速く走れば全部解決する」というテーゼそのものが、この瞬間揺らぎ始めるのである。

IV. 現実逃避と潜在空間——あれから 10 年

1) 登場人物紹介

樺木（かばき）：トガシが所属する実業団陸上部の後輩。全盛期のトガシの走りを知っており、かつてのトガシに憧れを抱いている。契約更新に安堵するトガシに「変わった」と告げ、その言葉がトガシの中で沈んでいたものを揺さぶることになる。

海堂（かいどう）：日本陸上界のトップスプリンターの一人。天性の短距離の才能を持ち、高校時代にはインターハイ優勝を狙える位置にいたが、15歳の財津の出現以来、15年にわたり万年2位の現実を突きつけられ続けている。しかしその現実を知り尽くした上で、なお「次こそ自分が勝つ」と信じきれる人物である。

森川（もりかわ）：インターハイ優勝の実績を持つ選手。大会前にトガシに握手を求め、トガシに憧れて陸上を始めたと語る。

2) 「変わった」という言葉の反復

インターハイから10年、トガシは実業団で陸上を続けていた。しかし成績はパッとせず、いつ契約を切られてもおかしくない状況にある。しかしそこに切迫感はない。戦いから身を引きつつあるかのような柔和さ。それは様々な喪失と現実を経てきたトガシのある種の成熟とも見える。クラインの言う抑うつポジション、すなわち万能感を手放し、現実の限界を受け入れて生きる姿勢が、そこにはあるようにも感じられる。

しかし後輩の樺木は、契約更新に安堵するトガシに「変わった」と告げる。かつてインターハイで小宮が「走り方、変わったね」と失望を込めて言ったのと同じ言葉が、ここで再び反復される。樺木の言葉は、全盛期のトガシの走りを知る者からの「あの頃に戻ってほしい」という願いであり、今のトガシへの落胆でもある。成熟した抑うつポジションに見えていたものは、本当に成熟であったのか。それとも走る意味を見失った諦めではなかったか。樺木の言葉は、穏やかさの下に埋もれていたトガシの中の何かに火をつけるのである。